



懇話会だより



7月4日(木) 先進校視察 京都市左京区 京都大原学院
 「日本のふるさとから世界へ！」
 大原のゆとりある心を 自信をもって伝えられる子に！」



京都市の中心部から北東へ 15 km、周りを山に囲まれた大原は地下鉄「国際会館」駅からバスで 30 分ほどのところにあります。三千院や寂光院、大原女など歴史ある土地に、平成 21 年春、施設一体型小中一貫校「京都大原学院」が開校しました。地域の特性を生かした魅力あるコミュニティスクールの大原学院を 14 名で訪問しました。



<校舎と運動場>



<正門>



<ベビーハウスを見学する参加者>

昭和 50 年代には小学校だけでも 250 名を超える児童がいましたが、現在は小中学校合わせて 85 名(各学年 1 クラス。最も人数が少ない学年は 4 年生で 6 人、最も多いのは 7 年生の 14 人)となっています。大原学院の校長先生や小学校の教頭先生、教務主任へ次のような内容の質問をしました。

「生駒でも生徒数減少を受けて一貫校の協議が始まりました。一貫校が魅力あるものとなり、地域の活性化につながれば、結果として人口増・生徒増につながると期待しています。大原では一貫校が始まってまだ 5 年で、成果を求めるのは早いと思いますが、何か成果は出てきていますか。」



「大原は市街化調整区域となっており、そのために人口が増えません。ここで育った子どもが大人になってもここに住めば子どもの数が増えるのではないのでしょうか。そのために特色ある学校、魅力ある学校になれば、と思っています。今、大原では自治会が中心となり、地域の人口を増やす取組である『さとづくりプラン』の実施を市に陳情しています。『地域のための学校』『学校がなくなれば地域が廃れる』、そんな思いが地域にはいつもあるのです。数年後、小中一貫教育の成果が出、人口も増えることを願っています。」



地域の願いである「若者が自分の子どもを学ばせたくなるような、魅力ある学校」とはどんな学校かについて、教職員や教育委員会、地域住民が議論を重ねたそうです。「様々な意見をすり合わせることは大変な作業でしたが、子どもたちの明るい笑顔を頼りに乗り越えてきました。」と校長先生は話されました。



<5年生の授業風景>



<職員室>

少人数の中で育った子どもたちにとってはコミュニケーション力が大きな課題となります。このことについては高山地区の保護者の皆さんがとても心配されていることで、「少人数で過ごす利点は何でしょうか?」と参加者が質問しました。



「家庭的雰囲気なのがいいです。生徒指導上の問題は起こった場所・起こった時に解決するようにしています。人数が多い学校ではリーダーにならない子どもが出てきますが、少人数だと全員がリーダーにならなくてははいけません。しかし、これをやりきると自信がつくんです。子どもたちは高校生になって初めて小集団を離れますが、高校を途中でやめる子はいません。」

大原学院では4・3・2制を導入しています。発達段階に合わせて前期（小1～小4）、中期（小5～中1）、後期（中2～中3）の3ブロックに分けてゆるやかな段差を作り、9年間の一貫性を重視した教育に取り組んでいます。また、5年生からは徐々に教科担任制を取り入れ、学級担任制からの緩やかな移行を図ります。

学校への誇りと愛着を持たせ、学校と家庭のけじめをつけるため、中期からは標準服であるブレザーを採用しており、中期はノーネクタイ、後期になるとネクタイ・リボンを着用するそうです（前期は式典時のみ、お揃いのトレーナーを着用）。標準服の着用はブロックごとの一体感の醸成や、子どもたちの自覚を促すことに大変役立っているとのことでした。

大原学院には0歳から6歳までの就学前の子どもたちが過ごす施設（ベビーハウス）もあります。幅広い年代の子どもたちが同じ敷地内で生活することで、「早くあんなふうになりたい」「良い手本になるようがんばろう」とお互いに成長できるのですね。



生駒市ホームページには先進校視察時の議事録要旨を掲載しております。小中一貫教育懇話会のページは以下のとおりです。

<http://www.city.ikoma.lg.jp/kashitsu/15200/03/01.html>

今後の予定は、

- ・7/25（木）第6回懇話会（生駒北小学校多目的室 19:00～21:00）
で、懇話会は傍聴可能です。